

紀要

■設立50周年記念号

- 鳥浜貝塚におけるニホンジカの利用…………… 佐藤 巧庸 (1)
- 土偶の意味論に関する理論的基盤の整理と試論…………… 瀬口 眞司 (13)
- 湖北・湖東地域の前期古墳の葺石…………… 宮村 誠二 (23)
- 横穴式石室の空間設計の検討
—志賀古墳群における平面プランと副葬土器…………… 堀 真人 (28)
- 木村石塚古墳出土埴輪について…………… 辻川 哲朗 (40)
- 近江八幡市大中の湖南遺跡の再検討
—石敷き遺構 第1遺構の構造について— …………… 田中 咲子 (57)
- 小型海獣葡萄鏡について…………… 福井 知樹 (61)
- 墨書土器にみる古代の近江 —その2—…………… 濱 修 (64)
- 比良山系の山寺に築かれた石垣と回峰ネットワーク… 小林 裕季 (79)
- 『阿刀氏家譜系脈 御由緒二関ハル古記調査書類』
現代語訳・解題(2)…………… 阿刀 弘史 (90)
- 将棋史研究ノート 11—改めて将棋について考える—…………… 三宅 弘 (98)
- 「清瀧寺徳源院」絵図の示すもの…………… 中川 治美 (107)
- マメ類の利用についての研究ノート(2)…………… 小竹 志織 (119)
- 木製品の保存処理について —課題と実際—…………… 中村 智孝 (122)

34

木村石塚古墳出土埴輪について

辻 川 哲 朗

1. はじめに

本稿の目的 環琵琶湖（近江）地域の埴輪資料については、以前に集成をおこない、円筒埴輪の編年をこころみたことがある（辻川 2003A）。それ以降の新出資料が増加しつつあるとともに、既報告資料のなかにも再検討を要する事例があることから、資料の見なおしを細々と継続してきた。この作業が完了後に、あらためて総括的な検討をおこなう予定ではあるものの、再検討作業の結果については適宜報告してきた（辻川 2006A・2006B・2007A・2007B・2010A・2010B・2011A・2011B・2011C・2013・2018 等）。本稿もそうした作業結果の一つであり、今回は東近江市木村古墳群の埴輪資料のなかから、石塚古墳(1)出土埴輪をとりあげる。

選択の理由 今回、木村石塚古墳出土資料（以下、本資料）を取り上げる理由についてのべておきたい。

本資料は、後述のとおり県営ほ場整備事業にともなう試掘調査（調査主体：滋賀県教育委員会〔以下、県教委〕、調査機関：財団法人滋賀県文化財保護協会〔以下、県協会〕）で出土したものである。この試掘調査では、消失した木村石塚古墳の周溝と目される溝が複数個所において検出され、埋土中から多量の埴輪片が出土した。

この試掘調査結果をうけて、その後に蒲生町教育委員会（以下、町教委）が実施した発掘調査では、木村石塚古墳の周溝の半分強程度が検出されたものの、遺構保全をはかるために遺構検出にとどめられ、遺構内の掘削はほとんど実施されなかった。そのため、出土資料がかなり限定されることになり、はからずも試掘調査にともなう本資料の方が質量ともにより充実した資料群になったのである。しかし残念なことに、試掘調査と発掘調査とで担当機関がことになったことが影響したためか、その後に刊行された発掘報告書には、発掘調査で出土した埴輪資料が提示されたものの、試掘調査で出土した本資料は掲載されず、本資料は未報告のまま滋賀県埋蔵文化財センター収蔵庫にながらく保管されてきたのである。

試掘調査担当者である平井美典氏から本資料の存在をご教示いただき、辻川は実測等の資料化をすすめていた。しかし、怠慢によりその成果を公表するまでにいたらなかった。今回公表を決意し、再度資料を実見したところ、本資料には既往の報告ではしられていなかった石見型埴輪と目される破片がふくまれるなどのあらたな知見がえられ、地域史復原に資するためにも、報告の必要性をあらためて痛感するにいたったのである。

このような経緯から、本稿の主たる目的は、平成 8(1996)

年度の試掘調査でえられた木村石塚古墳出土埴輪について、その内容を報告することにある。くわえて、派生する若干の課題についても検討をこころみ、木村石塚古墳にたいする基礎的な理解をえることにしたい。

よって、次章以下、まず木村石塚古墳がふくまれる木村古墳群の概要についてのべ（2 章）、木村石塚古墳の消滅前の状況（3 章）と既往の調査内容（4 章）について確認したのち、本埴輪資料の内容を報告する（5 章）。それらをふまえて、埴輪の位置づけをこころみたい（6 章）

2. 木村古墳群について（図 1・2）

2.1 古墳群の概要

位 置 現在の行政区画上でいうと、木村石塚古墳は滋賀県東近江市蒲生町（旧蒲生郡蒲生町木村）に所在した（図 1-①）。琵琶湖を中心とすると、その東岸中央部付近に位置することになる。

木村古墳群 木村石塚古墳の周辺には、比較的規模の大きな古墳をふくめ、複数の古墳が存在していた。しかし、そのほとんどは現在消滅している。これらを一括して木村古墳群と称している（図 1-②）。

戦前の認識 この木村古墳群については、すでに戦前の段階でその存在が認識されていた。大正 11（1922）年に刊行された『近江蒲生郡誌 巻壺』には、「大字木村には七塚、石塚、盛塚、簀戸塚、杉の森塚、ケンサイ塚等の名を有し古塚あり」（中川編 1922、p17）という記述がある。

2.2 戦後の開発と調査（図 2）

ケンサイ塚古墳の調査 このように、戦前から古墳群の存在は周知されていたものの、本格的な調査は実施されてこなかった。こうした状況がおおきく変化したのは、昭和 35（1950）年に実施されたケンサイ塚古墳の発掘調査である。この調査は土地区画整理事業にともなう緊急調査であった。

土地区画整理事業と古墳の破壊 名神高速道路が木村区域を通過することが決定すると、地元木村区では路線による潰地を軽減するために、区域内の山林・溜池の農地化をはかり、全農家で潰地を負担することを目的とした土地区画整理事業が昭和 34（1959）年 12 月からの三ヶ年計画で実施された（中島 1990）。そのさいに、農地化の対象として、区域内の山林一すなわち、ケンサイ塚古墳等が選択され、それらを削平して農地化をはかることが計画されたのである。それに先だち、ケンサイ塚古墳にたいしては、緊急発掘調査が当時同志社大学教授であった酒詰仲男氏によって

実施されることになった。なお、この調査の詳細については別稿（辻川 2013）で検討したので、それにゆずる。このように、ケンサイ塚古墳については、事前に緊急発掘調査が実施された。その一方で、木村石塚古墳をはじめとする他の古墳は未調査のまま削平され、地表面からその姿が消滅してしまった。

県営ほ場整備事業による試掘・発掘調査 その後、木村地区において県営ほ場整備事業が計画された。事業計画地内には周知の埋蔵文化財包蔵地（木村古墳群）がふくまれるため、平成 8（1996）年度に県教委を調査主体として、県協会を調査機関として、事業計画地のほぼ全域を対象とした試掘調査が実施された（2）。

【試掘調査】試掘調査の対象範囲には、木村石塚古墳・神輿塚古墳・ケンサイ塚古墳等の滅失した古墳推定地のほか、蝙蝠塚・神輿塚・藪戸塚といった古墳伝承地がふくまれており、それらの実態把握が期待された。試掘調査の結果、後述するように、石塚古墳については、墳丘が削平によりほぼ消滅していたものの、一部には墳丘盛土が遺存していること、また墳丘平面形態として前方部が短小な前方後円墳が想定できることなど、あらたな知見がえられた。さらに、削平された神輿塚古墳・ケンサイ塚古墳の推定地付近で周溝と目される溝状遺構が検出された。

【発掘調査】このような試掘調査の結果をふまえ、県教委・県土木・町教委等の関係諸機関による協議の結果、遺構が確認された地点のうち、切土・排水路部分をおもな対象として発掘調査を実施することになった。そこで、県教委からの委託を受けて町教委が木村古墳群にたいする発掘調査を平成 9～12（1997～2000）年度に実施した。その結果、すでに消滅していた神輿塚古墳・ケンサイ塚古墳・木村石塚古墳等の埋没古墳に関係する遺構を検出するにいたった。それら調査結果の詳細については、調査報告書が刊行されているので、それにゆずり、次章において後述する木村石塚古墳をのぞき、本稿では詳細な記述を省略する。

3. 木村石塚古墳の消滅以前の状況（図 2）

3.1 郷土誌の記録

消滅前の状況 地元の郷土史家である中島尹氏の『きむらのむかしからいま』（中島 1990）には、木村石塚古墳をはじめとする木村古墳群を構成する諸古墳の消滅前の状況に関する記載があるので、その内容について確認する。

「柳宮神社の南西約百米の小字石塚の田の真中にあり、ケンサイ塚に次ぐ大きな古墳で、直径約三十五米、高さ約五米、面積約二反歩の円墳で丘上は古い松林であった。

地元では石塚は「イセ塚」と呼ばれており伊勢信仰と関係があったのではないかとも思われる。

大正の終り頃古島萬次郎氏により塚の中心部の丘上を三米ほど掘り下げられたこともあるが何も発見されなかったということである。

この塚も昭和三十四年（一九五九）から始められた土地改良工事によって取り壊され（発掘調査は行われなかった）今は農地となり、昔の姿をしのぶことはできないが、今も小字名だけが残っている」（中島 1990、p. 14）。

こうした中島氏による記述の内容は、土地改良工事に先だって作成された地形図（図 2-②）によって裏づけられる。この地形図では、小字石塚の範囲内に径約 35m の平面不整円形を呈する墳丘が確認される。それにくわえて、その北側に墳丘から一定間隔をあけて東西にのび、その北東端で南側へ弧状に屈曲する畦畔が確認でき（図 2-②：A-B-C）、盾形周溝の痕跡の可能性があることや、墳丘の南西部には方形に取りつく地割（同：D）があり、造り出しもしくは前方部と推定されることには留意しておきたい。

なお、土地改良工事がほぼ完了した 1961 年に撮影された空中写真（図 2-①）では、木村石塚古墳の墳丘は滅失しており（旧畦畔がソイルマークとして遺存）、中島氏の記述を裏づけている。

3.2 小結

以上は、つぎの諸点にまとめることができよう。

①水田中に直径約 35m・高さ約 5m の円丘として遺存していた。土地改良工事前の地形図では、周辺の遺存地割から、墳丘の西方に前方部もしくは造り出しと目される方形の突出部があることや、墳丘北側の畦畔形状から盾形周溝の存在を推定できる。

②「石塚」もしくは「イセ塚」と地元で呼称されていた。

③大正末期に古島萬次郎氏により古墳の中央部を約 3m 掘削されたけれども、なにも出土しなかった。

④1959 年から開始された区画整理事業により未調査のまま消滅した。

4. 木村石塚古墳に対する既往調査とその内容（図 2・3）

4.1 県営ほ場整備事業に伴う試掘調査（図 2・3）

調査の概要 先述したとおり、県営ほ場整備事業が計画され、計画地内には周知の埋蔵文化財包蔵地（木村古墳群）がふくまれるため、平成 8（1996）年度に試掘調査が実施された（2）。以下、木村石塚古墳にかかわる調査内容について確認しておく

調査の内容 現地調査は、平成 8（1996）年 11 月 28 日から平成 9（1997）年 1 月 20 日にかけて実施された。調査方法は、排水路および切土予定地に、1×6m を基調とする試掘トレンチを 131 か所設定し、遺構・遺物の有無および深土の確認をおこなうものであった。その結果、ケンサイ塚古墳の周溝が確認されたほか、木村石塚古墳の周溝が検出された。

木村石塚古墳関連遺構の検出 木村石塚古墳推定地付近に設定された試掘トレンチ（図 3-①：G63・64・65・74・75）では、耕土直下に層厚約 0.3m の墳丘盛土が遺存していた

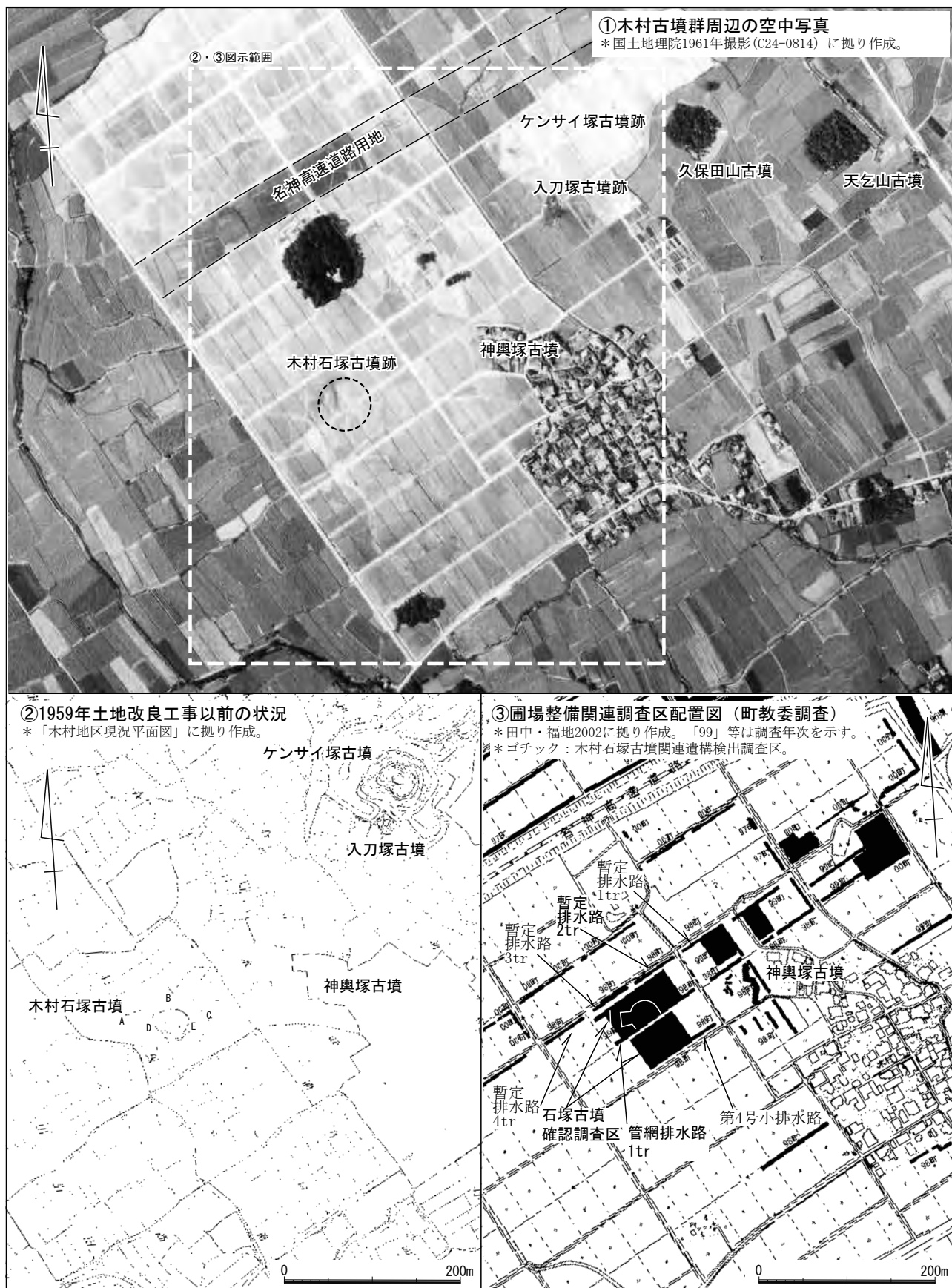


図2 木村石塚古墳と関連調査区の位置

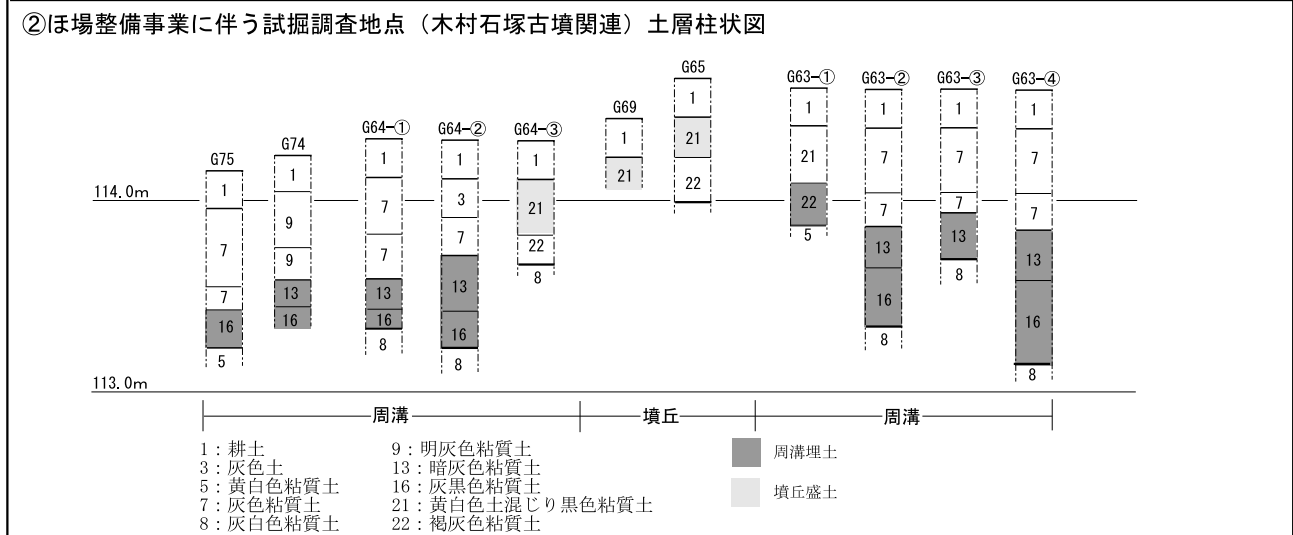


図3 1996年度県営ほ場整備事業に伴う試掘調査地点（木村石塚古墳関連）と土層柱状図
 ＊財団法人滋賀県文化財保護協会1997に拠り作成。



写真1 G63墳輪出土状況
 ＊財団法人滋賀県文化財保護協会1997



写真2 G64墳丘端部状況
 ＊財団法人滋賀県文化財保護協会1997

（同-②・写真2）。さらに、墳丘の外側には幅約10～13m・深さ約0.5mの周溝がめぐっており、周溝埋土には多量の埴輪が包含されていた（写真1）。この試掘調査での出土埴輪が本稿の主たる検討対象である。

4.2 平成10（1998）年度発掘調査（図2・4）

調査の概要 当該年度は、町教委によって、排水路設置にともなう発掘調査と、木村石塚古墳推定地における確認調査が実施された（田中他2000）。以下、その内容を確認しておきたい。

暫定排水路にともなう発掘調査 木村石塚古墳推定地の北側を西南から東北方向へむけて一直線に設定された4つの調査区である（図2-③）。このうち第3トレンチで「検出幅36m、深さ最大0.25mを測る落ち込み」（SX-1）が検出され、「落ち込みから多くの埴輪が出土し、須恵質の埴輪片も見られ」（田中他2000、p13）、石塚古墳周溝と推定された。出土埴輪（図4-58～72）には円筒埴輪と形象埴輪がある。円筒埴輪は、断面台形の突帯、外面調整がタテハケ調整、円形のスカシ孔をもつことを基本とする。形象埴輪としては「盾型埴輪」（図4-59）・「人型埴輪」（図4-60）・「家型埴輪」（図4-69～72）等の存在が報告されている（3）。

第4号支線排水路にともなう発掘調査 木村石塚古墳推定地の南側にあたる地点で実施された調査である。西南から西北方向の狭長な調査トレンチが設定された（図2-③）。ここでも木村石塚古墳の周溝と目される落ち込みが2か所で確認された（SR-1・2）。SR-1は、幅11.5m・深さ約0.4mを測る東西方向の落ち込みで、円筒埴輪片が出土している。SR-2は、SR-1の西方に位置する、幅15m以上・深さ約0.4mをはかる落ち込みであり、円筒埴輪片（図4-31・33～37）と形象埴輪片（図4-32）の出土が報告されている（4）。提示された実測図によると、いずれも小片で、様相をしりがたい。

管網調査区 排水管理設にともなう調査であり、幅1mの狭長な調査トレンチによるため、遺構の規模等不十分な点がおおいとする（図2-③）。木村石塚古墳関連遺構として、以下の諸遺構が報告されている。第1トレンチでは、2か所で周溝と目される遺構（SX-1・2）が検出された。SX-1は、トレンチ東側に位置する落ち込みで、幅19.5m・深さ最大約0.5mを測る。SX-2はトレンチ西側に位置する落ち込みで、幅19.5m以上・深さ最大0.5mを測る。報告書ではいずれの遺構からも円筒埴輪片が出土したとされるが、図示されるのはSX-1出土円筒埴輪片（図4-6～20）のみである。これらの円筒埴輪は、大半が断面台形の突帯、外面調整がタテハケ調整、円形のスカシ孔をもつことを基本とするもので、他の調査区での出土品と同様の様相をしめす。

石塚古墳確認調査区 調査報告書によると「この調査区は、滋賀県教育委員会が実施した試掘調査の結果、耕土直下に古墳のマウンドが検出されており、工事に伴い石塚古墳の

墳丘が破壊される恐れがあり、文化財調査の一部として、重機の（ママ）による表土除去作業及び墳丘規模の確認調査を行った」とする（田中他2000、p22）。その結果、「表土下5～1m（ママ：cmか）の床土の堆積が確認できた。盛り土対応工区であるため、調査は墳丘規模の表面的な確認にとどめ、周濠部分など掘削をほとんど実施しなかった」ともいう（同、p22）。

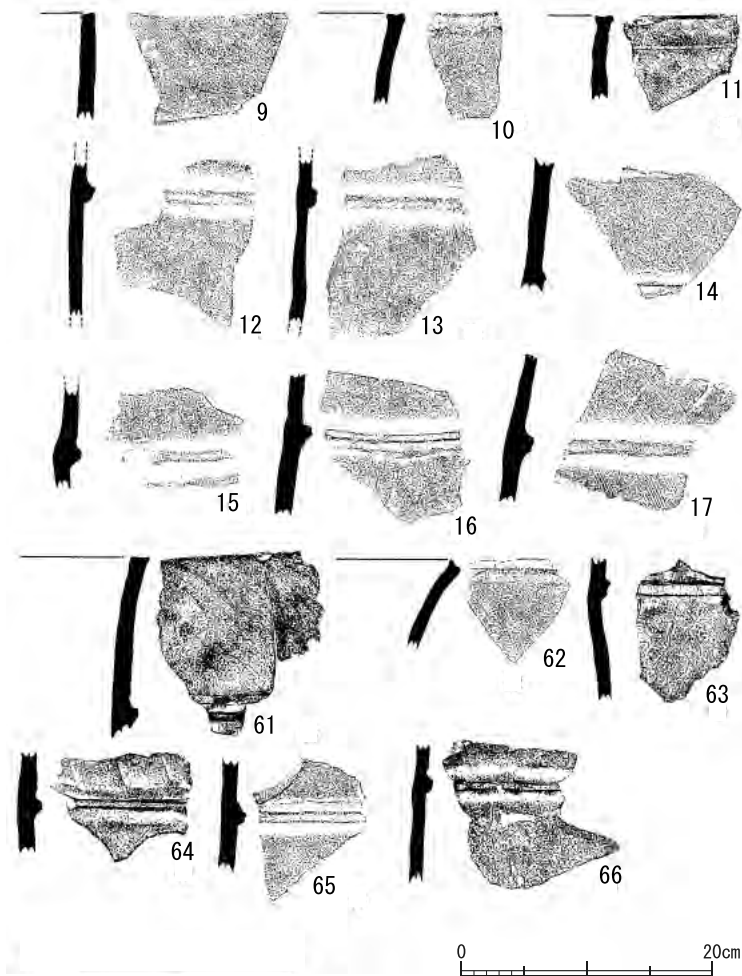
なお、調査報告書では、この調査区にかんする情報の提示は上記の本文の記述と遺構写真4カット（図版十二・十三）、調査トレンチの配置図（図2）しかない。遺構保全をはかるために遺構検出にとどめたということではある。しかし、作成されたはずの平面的情報を示す平面図等の図面は提示されていないので、詳細をしりえない。

4.3 平成11（1999）年度の発掘調査（図2・4・5）

調査の概要 当該年度は、平成10（1998）年度に引きつづき、木村石塚古墳推定地での確認調査が実施された（図2-③）。当該年度の調査区は前年度調査区の北側に位置する。前年度と同様に、遺構保全のために遺構検出のみにとどめ、遺構掘削をほとんど実施しない調査であった。以下、調査報告書（田中他2001）の記述を確認しておきたい。

調査の結果 調査報告書によると、「（前略）表土下5～10m（ママ：cmか）の床土、旧盛り土の堆積層が確認できた」（福地他2001、p6）という。また、「調査の結果、石塚古墳は直径約35～40mの円墳で、幅15～20m規模の周濠を有する全長約50mを越える大型墳であることが明らかとなった。また、墳丘西側に18×14mを測る長方形の造り出しが付設されていた。先述のように遺構の掘り下げはほとんど行っていないため、墳丘裾部の確認はできていない」（同、p6）とする。さらに、昭和30年代の写真を見ると、墳丘東側にも造り出しを思わせる地割（畦）が見られる（図2-②：Eか）ことから、「東西に造り出しをもつ可能性が残る」とも指摘している。また、出土遺物については、平面形態の検出にとどまるためにとぼしく、「円筒埴輪片・須恵器片のほか近世以降陶器のかけらが出土した」（同、p16）という。

以上のような本文の記述にくわえて、報告書には、検出した墳丘輪郭推定ラインを破線でしめした「石塚古墳平面実測図」（図5：報告書第3図）と写真図版（報告書図版一・二）が掲示されている。前者には、墳丘輪郭ラインとともに、その根拠となったはずの複数の断割トレンチが提示されている。しかし、残念ながら、そうした断割トレンチの詳細は本文中に見あたらないし、層位等の垂直情報についても一切図示されていない。さらに、写真図版についても、墳丘輪郭推定の根拠になったと目される確認調査区の「調査状況」もしくは「確認調査状況」と題された調査区全体の俯瞰写真が提示されるだけで、看取できる情報はすくない。このように限定された報告書の提示情報からわ



6～25：暫定排水路第3トレンチSX-1出土埴輪
 31～37：第4号支線排水路トレンチSR-7出土
 58～72：管網調査区第1トレンチSX-1出土埴輪

図4 木村石塚古墳出土埴輪（蒲生町教育委員会調査分）
 ＊田中他2000に拠り作成。遺物番号は報告書番号に依拠した。

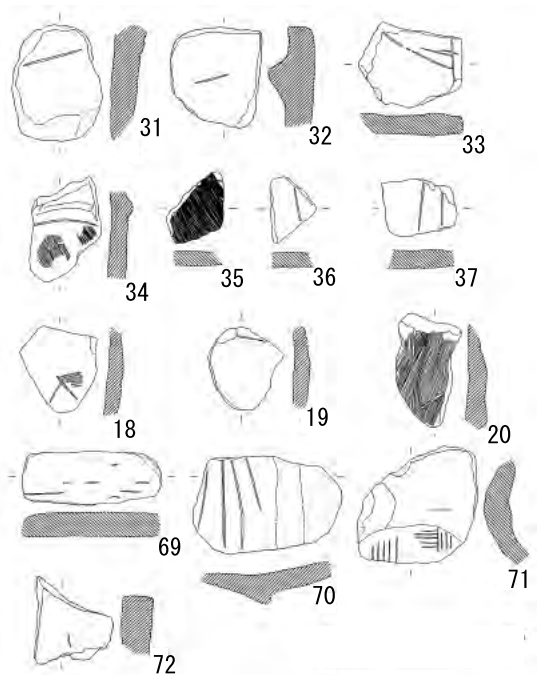


図5 木村石塚古墳「平面実測図」
 ＊田中他2001。

かる内容をまとめると以下の諸点になる。

①表土下で遺構検出面にいたり、墳丘輪郭が検出された。

②墳丘の各所には断割が設定された。

③墳丘西側には周濠の輪郭の一部が確認された。

④墳丘形態・規模については「直径約 35～40m の円墳で」（田中他 2000、p6）、「墳丘西側に東西 18m×南北 14m を測る造り出しを持」（同、p20）ち、「幅 15～20m 規模の周濠を有する全長約 50m を超える大型墳」（同、p6）と推定された。

5. 平成 8 年度試掘調査出土埴輪について（図 6～11、表 1）

5.1 内 容

資料概要 本資料は、平成 8（1996）年度に実施された試掘調査で出土したものである。分量は収納用コンテナ約 6 箱程度で、滋賀県埋蔵文化財センターに収蔵されている。そのほとんどが埴輪である。さらに、その大半は円筒埴輪であり、一部に形象埴輪（蓋形・石見型）をふくむ。これ以外に須恵器壺片 1 点がある。遺物はすべて洗浄済で、注記・復元作業も実施されていた。

出土地区 大半の破片では「試掘グリッド名（G○と記載）＋出土年（月日）」という墨書による注記を確認できた。これらの注記によると、埴輪の出土地区は G63・G64・G74 の 3 つのグリッド（図 3）に限定される。各事例の出土地区は表 1 に記載している。

5.2 円筒埴輪（図 6・7、表 1）

資料化の方針 大半が図化しがたい細片であったため、資料化するにあたっては、以下の方針で図化をすすめた。円筒埴輪については、口縁部・突帯・スカシ・底部等の各部形状をしめす個体と、内外面調整の痕跡をのこす体部片とを抽出し、実測対象とした。実測点数は 33 点である。出土地区別にその内訳をしめすと、G63 が 25 点、G64 が 7 点、G74 が 1 点となった。

器 種 町教委の調査では朝顔形埴輪は未確認であったが、本資料からは、口縁部片・頸部片から朝顔形円筒埴輪（以下、朝顔形埴輪）が確実に存在したことが判明する。また、普通円筒埴輪（以下、普通円筒）についても、口縁部片の存在から一定量存在したことが確実である。

なお、以下においては、胎土・焼成・色調といった共通する属性について記述したのち、普通円筒埴輪と朝顔形埴輪に項をわけて記述する。ただし、普通円筒埴輪と朝顔形埴輪とを明確に識別できなかった個体については、普通円筒埴輪の項のなかで一括して記述することにした。

胎 土 各個体をととして比較的均一である。径 1 mm 以下の砂粒（亜角礫）を比較的小くおおく包含する。

色調・焼成 内外面ともに、にぶい橙～黄褐色を基調とする。個別の詳細については表 1 にまとめた。一部に須恵質焼成品をふくみ、確実な黒斑は確認できないので、穴窯

焼成品であるとみてよい。

普通円筒埴輪・円筒埴輪 数量的に卓越するものの、いずれも破片であって、全形・段構成をうかがうにはいたらなかった。今回の資料化するにあたっては、口縁部・突帯・スカシ・底部等の各部形状をしめす破片のなかから、諸属性に留意しつつ、バリエーションを提示できるように抽出し、以下部位ごとに記述する（図 6・7）（5）。

【口縁部】普通円筒埴輪の口縁部と判断された 5 点を図示した（図 6-1～4、図 7-34）。これらは、ほぼ直立する断面形態で、外面を左傾ナナメハケにより、内面をナデにより調整したのち、上端部と内外面端部付近にヨコナデ調整をくわえることを基調とする。1・4 は、口縁部の上端から下段突帯まで遺存する。口縁部高は、1 が 12 cm、4 は 13 cm である。いずれも突帯下方には円形スカシの一部がのこる。4 の外面には、円弧とその左端に直交する短直線がヘラ描きされている。34 は大型の口縁部片である。歪みがいちじるしいため、口径を復元しがたい。口縁部高は 20 cm 以上をはかる。内外面を左傾ナナメハケにより調整する。

【突帯部・スカシ部】5～26 は突帯部およびスカシ部の破片である。突帯断面形状は、上辺角部が下辺角部よりも突出する低平な台形を基調とする。突帯の貼付方式については、断続ナデ A・B 技法（川西 1978、鐘方他 1992）は確認できなかった。また、突帯の剥離部分がないので、突帯間隔設定のための指標の有無は不明であるが、7 の上辺には断面 L 字状圧痕（辻川 2003B）を確認できた。23 は体部片で、突帯をはさんで上下 2 条の突帯が遺存し、突帯間隔（9 cm）が判明する。また、10・11 には、いずれも円形スカシの一部がのこる。これらの体部片の器面調整は、外面が一次調整として左傾ナナメハケもしくはタテハケをほどこし、内面は左傾ナナメハケもしくはタテハケ、ナデによって調整することを基調とする。外面調整のタテハケは、ハケメ密度が粗い（2～3 本/cm）一群と、細かい（約 8～10 本/cm）一群に大別できる。15 外面には、ヘラ描きによる左傾・右傾した直線 3 条が確認できる。

【底部】4 点を図示した（27～30）。そのうち 2 点について底部高が判明し、29 が 9 cm、30 が 10.4 cm である。底径は 27 cm 程度に復元できた（28）。突帯については、1 条目突帯が遺存する例（30）をみると、突帯の断面形状が低平な台形を呈する点が体部の突帯断面形状と共通する。器面調整は、外面を左傾ナナメハケで、内面を左傾ナナメナデでそれぞれ調整することを基調とする。現時点では、これらの外面下半に底部調整の板圧痕は確認できない。

朝顔形埴輪 確実に朝顔形埴輪と判別できる破片は 2 点あった（図 7-31・32）。31 は一次口縁から二次口縁にかけての付近の破片である。端部は面を作りだしている。外面にはタテハケ調整を、内面は右傾ナナメハケ調整による。32 は頸部片である。頸部には突帯の剥離痕跡がのこる。外面に左傾ナナメハケ調整、内面にナナメナデ調整をほどこす。

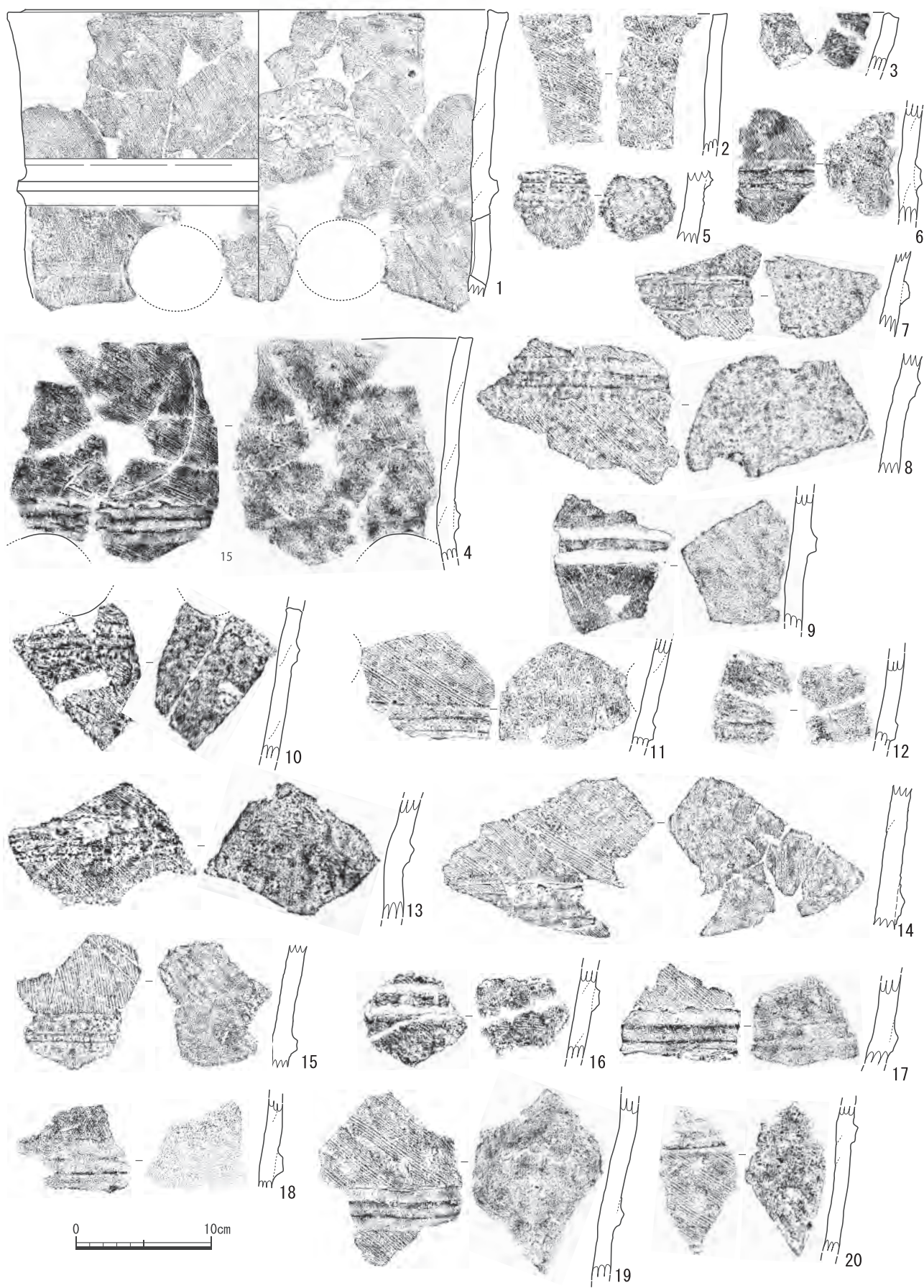


图6 埴輪実測図1 (普通円筒埴輪・円筒埴輪)

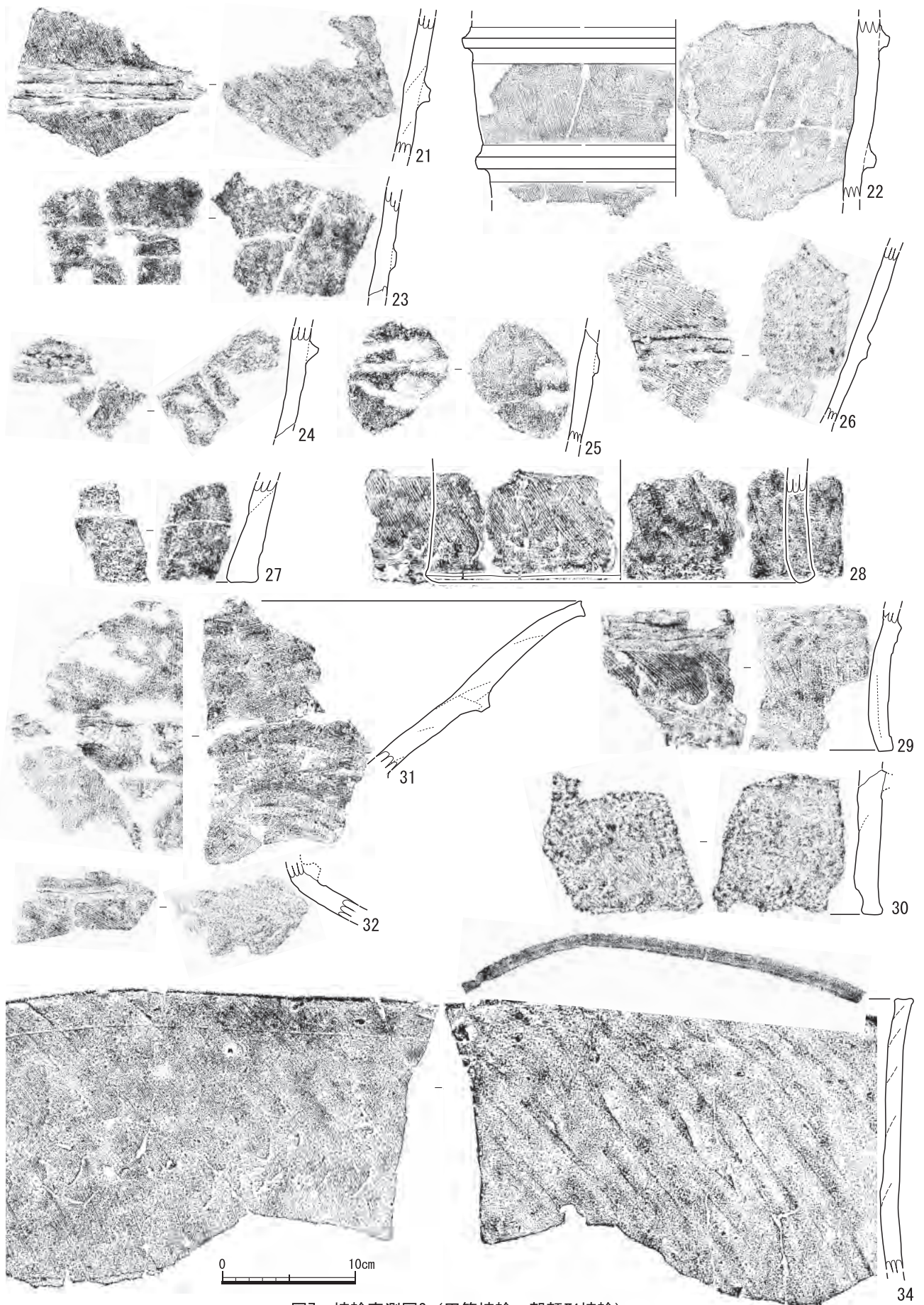


図7 埴輪実測図2（円筒埴輪・朝顔形埴輪）



図8 埴輪実測図3 (形象埴輪)

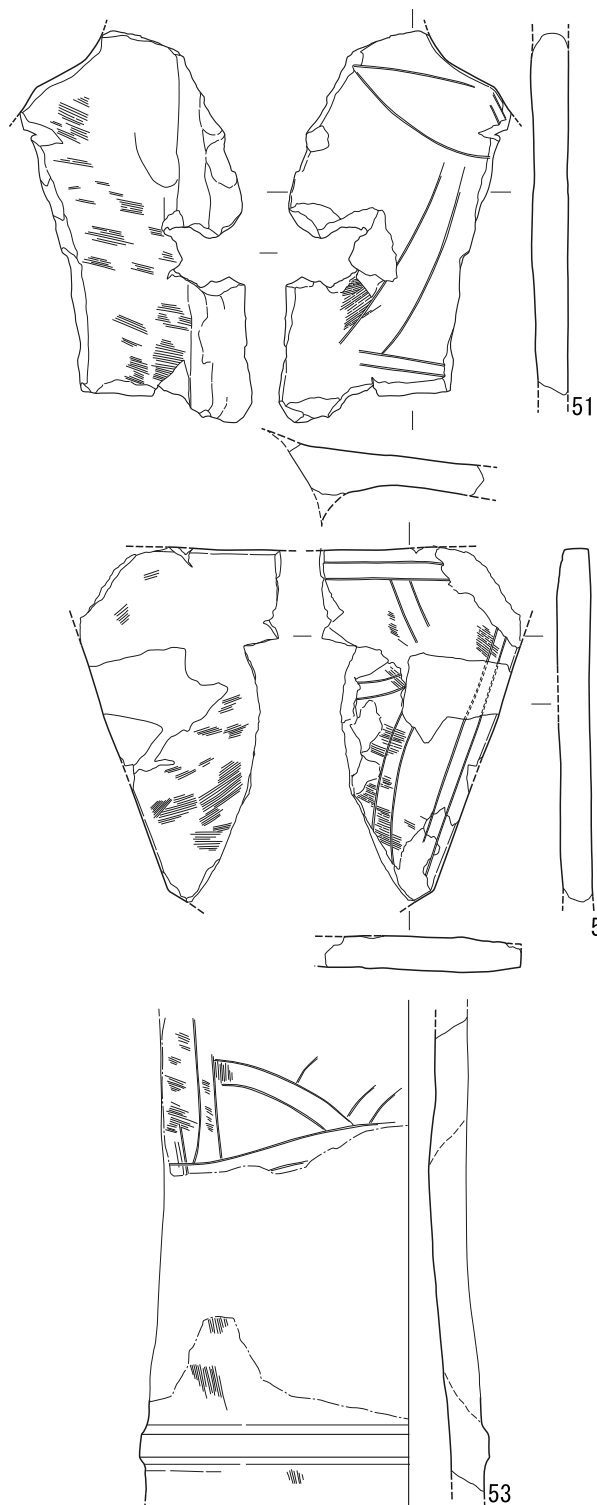


図9 埴輪実測図4（形象埴輪）・須恵器実測図

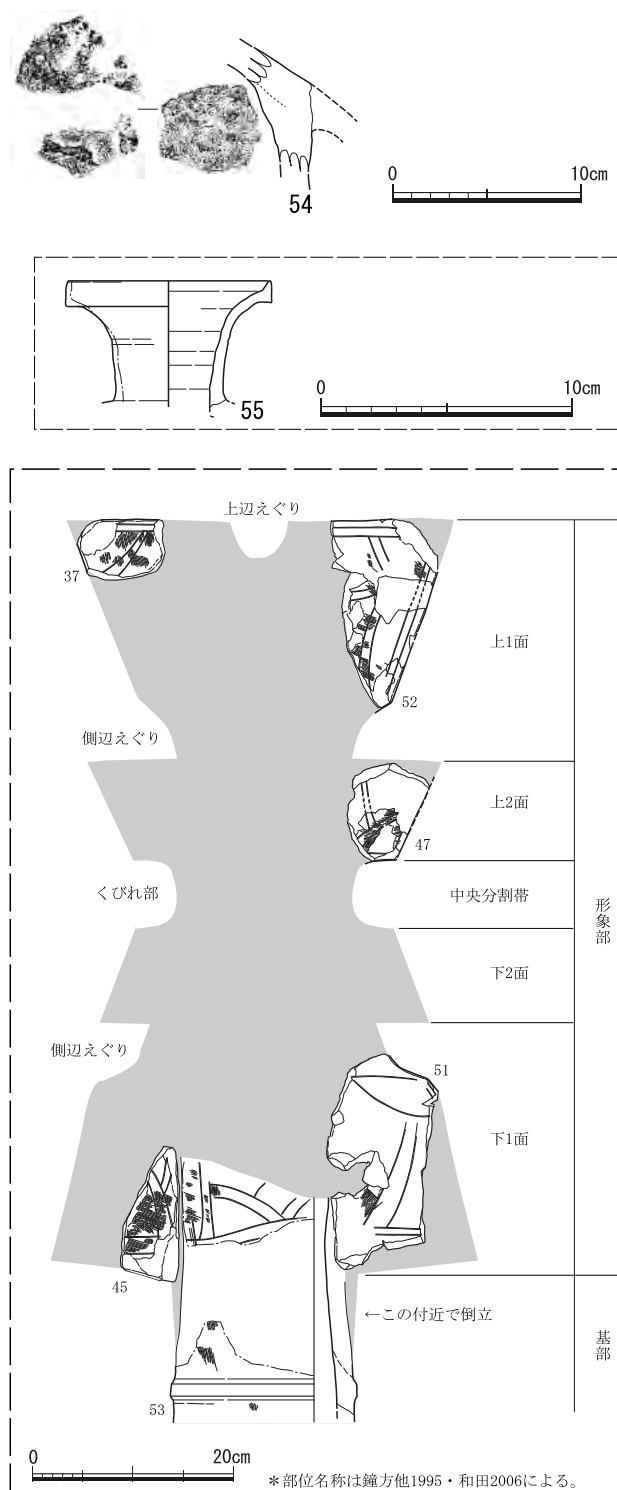


図10 石見型埴輪推定復原図

表1 埴輪一覧表（平成8年度試掘調査）

番号		出土地区等		年月日	器種	遺存部位	突帯	スカシ	焼成	色調		
掲載	実測	地区	出土遺構							外面	断面	内面
1	1	G63	落ち込み1	961225	普門	口一休	×	○	土師質	浅黄橙(7.5YR8/3)	浅黄橙(7.5YR8/3)	浅黄橙(7.5YR8/3)
2	23	G63	石塚周濠	961225	普門	口縁	×		土師質	浅黄橙(10YR8/4)	明青灰(10BG7/1)	にぶい橙(5YR7/4)
3	28	G64	石塚周濠	961225	普門	口縁	×		土師質	橙(7.5YR7/6)	明緑灰(10GY8/1)	橙(7.5YR7/6)
4	15	G63	石塚周濠	961225	円筒	口縁	○	○	土師質	橙(7.5YR7/6)	明青灰(10BG7/1)	橙(7.5YR7/6)
5	6	G63	石塚周濠	961225	円筒	体部	○		土師質	にぶい橙(5YR6/4)	にぶい橙(5YR6/4)	にぶい橙(5YR6/4)
6	17	G63	石塚周濠	961225	円筒	体部	○		土師質	にぶい橙(7.5YR7/4)	青灰(5B6/1)	にぶい橙(7.5YR7/4)
7	7	G63	石塚周濠	961225	円筒	体部	○		須恵質	褐灰(10YR6/1)	明オリーブ灰(2.5GY7/1)	褐灰(10YR6/1)
8	4	G63	石塚周濠	961225	円筒	体部	○		土師質	にぶい橙(5YR7/4)	緑灰(10GY6/1)	にぶい橙(5YR7/4)
9	24	G63	石塚周濠	961225	円筒	体部	○		土師質	にぶい橙(7.5YR7/4)	明青灰(10BG7/1)	にぶい橙(7.5YR7/4)
10	14	G63	石塚周濠	961225	円筒	体部	○		土師質	橙(5YR7/6)	明青灰(10BG7/1)	橙(5YR7/6)
11	20	G63	石塚周濠	961225	円筒	体部	○	○	土師質	にぶい橙(7.5YR7/4)	明青灰(10BG7/1)	にぶい橙(7.5YR7/4)
12	30	G64	石塚周濠	961225	円筒	体部	○		土師質	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)
13	9	G63	石塚周濠	961225	円筒	体部	○		土師質	橙(7.5YR7/6)	明青灰(10BG7/1)	橙(7.5YR7/6)
14	3	G63	落ち込み1	961225	円筒	体部	○		土師質	橙(5YR7/6)～緑灰(10GY6/1)	橙(5YR7/6)～緑灰(10GY6/1)	橙(5YR7/6)～緑灰(10GY6/1)
15	5	G63	石塚周濠	961225	円筒	体部	○		土師質	にぶい橙(5YR7/4)	明緑灰(7.5GY8/1)	にぶい橙(5YR7/4)
16	29	G64	石塚周濠	961225	円筒	体部	○		土師質	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)
17	8	G63	石塚周濠	961225	円筒	体部	○		土師質	橙(7.5YR7/6)	明青灰(6.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)
18	13	G63	石塚周濠	961225	円筒	体部	○		土師質	浅黄橙(7.5YR8/3)	明緑灰(10GY7/1)	浅黄橙(7.5YR8/3)
19	10	G63	石塚周濠	961225	円筒	体部	○		土師質	浅黄橙(7.5YR8/6)	浅黄橙(7.5YR8/6)	浅黄橙(7.5YR8/6)
20	22	G63	石塚周濠	961225	円筒	体部	○		土師質	にぶい橙(7.5YR7/4)	明青灰(10BG7/1)	にぶい橙(7.5YR7/4)
21	18	G63	石塚周濠	961225	円筒	体部	○		土師質	浅黄橙(7.5YR8/4)	明青灰(10BG7/1)	浅黄橙(7.5YR8/4)
22	2	G63	落ち込み1	961225	円筒	体部	×		土師質	浅黄橙(7.5YR8/3)	浅黄橙(7.5YR8/3)	浅黄橙(7.5YR8/3)
23	32	G64	石塚周濠	961225	円筒	体部	○		土師質	浅黄(2.5YR8/4)	灰(N7/0)	浅黄(2.5YR8/4)
24	27	G64	石塚周濠	961225	円筒	体部	○		土師質	浅黄橙～黄橙(10YR8/4～8/6)	明青灰(5B7/1)	浅黄橙～黄橙(10YR8/4～8/6)
25	31	G64	石塚周濠	961225	円筒	体部	○		土師質	浅黄橙(10YR8/4)	灰白(2.5YR8/2)	浅黄橙(10YR8/4)
26	19	G63	石塚周濠	961225	円筒	体部	○		土師質	浅黄橙(7.5YR8/4)	明青灰(10BG7/1)	浅黄橙(7.5YR8/4)
27	11	G63	石塚周濠	961225	円筒	底部	×		土師質	浅黄橙(10YR8/3)	灰N5/0	浅黄橙(10YR8/3)
28	25	G63	石塚周濠	961225	円筒	底部	×		土師質	灰褐(7.5YR6/2)	灰褐(7.5YR6/2)	にぶい橙(7.5YR7/3)
29	16	G63	石塚周濠	961225	円筒	底部	○		土師質	にぶい橙(7.5YR7/4)	明青灰(10BG7/1)	にぶい橙(7.5YR7/4)
30	12	G63	石塚周濠	961225	円筒	底部	×		土師質	黄橙(7.5YR8/8)	明緑灰(10GY8/1)	黄橙(7.5YR8/8)
31	21	G63	石塚周濠	961225	朝顔	口縁	○		土師質	黄橙(10YR8/6)	明青灰(10BG7/1)	黄橙(10YR8/6)
32	26	G64	石塚周濠	961225	朝顔	頸部	○		須恵質	青灰(5PB6/1)	灰(N6/0)	にぶい橙(5YR7/4)
33	54	G74	灰黒色粘土層	961226	普門	口縁	×		土師質	灰黄褐(10YR8/6)	明青灰(5B7/1)	灰黄褐(10YR8/6)
34	36	G64	石塚周濠	961225	石見?				土師質	黄橙(7.5YR7/8)	黄橙(7.5YR7/8)	黄橙(7.5YR7/8)
35	41	G63	石塚周濠	961225	石見?				土師質	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)
36	34	G64	石塚周濠	961225	石見?				土師質	浅黄橙(10YR8/4)	灰(N7/0)	浅黄橙(10YR8/4)
37	37	G64	石塚周濠	961225	石見?				土師質	黄橙(7.5YR7/8)	黄橙(7.5YR7/8)	黄橙(7.5YR7/8)
38	40	G64	石塚周濠	961225	石見?				土師質	橙(5YR7/8)	橙(5YR7/8)	橙(5YR7/8)
39	35	G64	石塚周濠	961225	石見?				土師質	浅黄橙(10YR8/4)	灰(N7/0)	浅黄橙(10YR8/4)
40	38	G64	石塚周濠	961225	石見?				土師質	橙(7.5YR6/8)	褐灰(7.5YR6/1)	橙(7.5YR6/8)
41	47	G64	石塚	961225	石見?				土師質	橙(7.5YR6/8)	橙(7.5YR6/8)	橙(7.5YR6/8)
42	51	G64	石塚	961225	石見?				土師質	橙(7.5YR6/6)	灰(N7/0)	橙(7.5YR6/6)
43	44				石見?				土師質	橙(7.5YR6/8)	橙(7.5YR6/8)	橙(7.5YR6/8)
44	42	G64	石塚周濠	961225	石見?				土師質	橙(5YR7/8)	橙(5YR7/8)	橙(5YR7/8)
45	52	G64	石塚	961225	石見?				土師質	橙(7.5YR7/6)	灰(N7/0)	橙(7.5YR7/6)
46	46				石見?				土師質	橙(7.5YR6/8)	橙(7.5YR6/8)	橙(7.5YR6/8)
47	43	G64		961225	石見?				土師質	橙(7.5YR6/8)	橙(7.5YR6/8)	橙(7.5YR6/8)
48	49	G64	石塚	961225	石見?				土師質	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)
49	50	G64	石塚	961225	石見?				土師質	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)
50	48	G64	石塚	961225	石見?				土師質	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(10YR8/3)
51	39	G64	石塚周濠	961225	石見?				土師質	黄橙(7.5YR7/8)	黄橙(7.5YR7/8)	黄橙(7.5YR7/8)
52	45	G64	石塚	961225	石見?				土師質	橙(5YR7/8)	橙(5YR7/8)	橙(5YR7/8)
53	53	G64	石塚	961225	石見?				土師質	橙(7.5YR7/6)	灰(N7/0)	橙(7.5YR7/6)
54	33	G64	石塚周濠	961225	蓋	笠部	-		土師質	浅黄橙(10YR8/4)	灰(N7/0)	にぶい橙(7.5YR7/4)

* 普門：普通円筒埴輪、朝顔：朝顔形埴輪。

5.3 形象埴輪（図8・9、表1）

資料化の方針 基本的に形象埴輪と判断しえた破片はすべて実測対象とした。実測点数は21点である。

器種 本資料群には、石見型埴輪・蓋形埴輪の存在が確認された。以下においては、胎土・焼成・色調といった共通する属性について記述したのち、器種ごとに記述する。

胎土 円筒埴輪と様相は同様であり、各個体をとおして比較的均一で、径1mm以下の砂粒（亜角礫）を比較的小く包含する。

色調・焼成 円筒埴輪と同様の様相である。内外面ともに、にぶい橙～黄褐色を基調とした無黒斑の穴窯焼成品である。個別の色調は表1を参照いただきたい。

石見型埴輪 20点を図示した（図8・9-34～53）。以下、各破片について記述していく。なお、記述にもちいる各部

名称は図10にしめしている。

34～41・43・44は、片面に施文した板状品で、石見型埴輪の形象部付近の破片と目される。34は、2条平行沈線(6)で長辺にそって区画し、内部に弧状の文様をくわえる。外面は右傾タテハケ、内面はナデにより調整する。35は2条平行沈線で施文する。外面は右傾ナナメハケ、内面は左傾ナナメハケにより調整する。36は、外面に2条平行沈線による弧状表現と、その下部に1条沈線による横線、さらにそれに斜交する二線をくわえる(7)。外面はタテハケ調整、内面はナデ調整による。37は二端面が遺存し、それらが鋭角にまじわることから、上段面隅部付近と推定した。外面は2条平行沈線で上端を水平方向に区画し、その下部に弧状表現をくわえる。外面は左傾タテハケ調整、内面はナデ調整による。38は、外面を2条平行沈線により横方向に区切る。外面はヨコハケ調整、内面はナデ調整による。39は、

外面を側辺にそって1条沈線で区画してその内部に鋸歯状表現を付加し、その内側に2条平行沈線による弧状表現がほどこされた板状品である。40は、外面に弧状表現が一部確認される。内面は右傾ナナメハケ調整である。41は外面に2条平行沈線による弧状表現がなされる。外面は右傾ナナメハケ調整、内面はナデ調整である。43は外面に2条平行沈線文による弧状表現がみとめられる。外面は左傾ナナメハケ、内面はオサエ・タテハケによる調整である。44も同様に、外面には2条平行沈線による弧状表現があり、内外面ともにナデ調整による。

42・45～51は円筒との接合部付近の鱗部片である。42は内外面ともにヨコハケ調整である。45は、下段面下辺付近に相当する可能性がある。2条平行沈線で下辺にそって区画し、その下部に弧状表現をくわえる。外面は右傾ナナメハケ、内面はヨコハケ調整である。46は、外面に左傾ナナメハケ調整の後、2条平行沈線によって弧状表現がなされる。内面はヨコハケ調整による。47は、側辺と下辺が遺存しており、両辺は鈍角でまじわるので、上部帯端部片と推定した。外面には、2条平行沈線で側辺にそって区画した内部に弧状表現をくわえる。外面はヨコハケ調整、内面はナデ調整による。48は下辺が遺存し、ゆるやかな円弧をえがく。円弧を下辺として図示したが、天地については確定しがたい。外面は、下辺にそって2条平行沈線で区切ったのち、上部に直交する1条沈線をくわえる。外面は右傾ナナメハケ、内面はナデによって調整する。49は外面に横方向の沈線を上下1条ずつ、2条をくわえている。遺存状態により、これらが1条沈線なのか、2条平行沈線なのか不明である。内外面の一部にヨコハケ調整がのこる。50は一部に沈線が確認できるが、詳細は不明である。内外面にヨコハケ調整が一部にみとめられる。51は残存長20cm以上の比較的大型片である。上辺はゆるやかな弧状を呈し、側辺えぐりに相当するとかんがえ、下1面の上辺部付近と推定した。外面には上辺部付近を下辺にそって2条平行沈線によって区画するとともに、遺存部分の下端付近にも2条平行沈線による横方向の区画が確認できる。その内容に間隔も不ぞろいで粗雑な弧状表現がくわえられる。内外面には一部にナナメハケ調整がのこる。

52は上1面の隅部付近と目される比較的大型の板状品である。上辺・側辺と下辺の一部が遺存する。上辺と側辺は鋭角で、側辺と下辺は鈍角でまじわる。後者は側辺えぐりの一部に相当しよう。外面には、上辺と側辺にそって2条平行沈線で区画され、その内部に同じく2条平行沈線で弧状表現がくわえられる。調整は、内外面ともにナナメハケが確認できる。

53は基部片である。直径約16～18cmの円筒形を呈し、外面の一面に2条平行沈線による弧状表現がのこる。それに隣接して、縦方向の剥離痕がみとめられるので、鱗部が貼付されていたことがわかる。円筒部の下方には、断面形

態が低平な台形を呈する突帯がめぐる。断面観察から、突帯上部付近の粘土紐接合痕跡は外傾である一方、そこから約20cm上方では内傾接合に変化しているので、いわゆる倒立技法による製作が想定できる。

蓋形埴輪 1点を確認した（図9-54）。笠部と円筒部との接合部付近の破片である。外面には施文は確認できない。内面はナデによる調整である。

5.4 須恵器（図9）

なお、須恵器瓶1点（図9-55）がG63の周溝底直上から出土しているので、あわせて報告しておく。55は口縁部片である。口縁部はおおきく外反し、端部を情報に摘みあげる。内外面ともに回転ヨコナデによって調整する。形態から古墳時代ではなく、古代の所産であろう。後世に周溝に混入したものとみておきたい。

6. 古墳と埴輪の検討

前章において、平成8（1996）年度の試掘調査によって出土した埴輪資料を紹介してきた。ここでは、その内容をうけて、若干ながら、本資料の位置づけを検討するが、それに先だち、墳丘についても、調査の結果を確認しておく。

6.1 古墳の検討

墳丘について 先述したとおり、木村石塚古墳の墳丘は、土地改良工事により地表から消滅したが、ほ場整備事業とともに発掘調査で周溝が検出された。年度ごとに報告内容は若干ことなるものの、最終年度の報告書には以下のように墳丘にかんする情報がまとめられている。

「直径約40mの後円部と西方向に僅かに撥形に開く最大幅約18m・長さ約14mの後方部（ママ：前方部か）からなる帆立貝式古墳であることが確認された。周濠のラインは明確でないが後方部（ママ：前方部か）で直線的になり馬蹄形を呈すると推定される。墳丘裾部には葺石が施されて」いないとする（田中他2002、p29）。

上記の内容は平成10・11年度調査の「平面実測図」（図5、田中他2001）からもほぼ裏づけられるとかんがえるので、墳丘本体については、これにしたがっておきたい。なお、図5には、周溝の輪郭ラインは前方部南側しか図示されていない。これは、それ以外の部分の輪郭ラインが「明確ではな」（同、p29）だったからであろう（8）。このように周溝の外郭ラインについては、いまだ確定できていないのが現状であり、この点に課題をのこしている（9）。

6.2 埴輪の検討

円筒埴輪について まず時期的な位置づけを検討する。円筒埴輪については、明確に時期のことなる事例を資料内に見いだせず、一定のまとまりをもった資料といえる。この点を確認したうえで、円筒埴輪の特徴を以下にまとめる。

①朝顔形埴輪と普通円筒埴輪から構成される。

②普通円筒埴輪の口径は 30 cm 程度、底部径は 27 cm 程度であり、円筒埴輪としては中型品である。一方、少量ながら、大型品（34）もみとめられる。

③焼成は無黒斑土師質焼成を基調とし、一部に須恵質に焼成された個体がある。

④器面調整は、外面一次タテハケ・ナナメハケ調整、内面ナデ・ハケ調整を基調とする。

⑤突帯は低平な台形の断面形状を基調とし、断続ナデ技法は確認できない。

⑥スカシは円形スカシのみ確認した。配置については 1 段 2 孔といえるものの、段ごとの配置は不明である。

⑦底部調整については、確認できる個体はなかった。

これらの特徴のなかで、⑥は川西編年Ⅲ期（川西 1978）・埴輪検討会編年Ⅲ-2 期（埴輪検討会編 2003A・2003B）以降、③は川西編年Ⅳ期以降・埴輪検討会編年Ⅳ-1 期以降の特徴であり、③・④は川西編年Ⅴ期・埴輪検討会編年Ⅴ-1・2 期の特徴である。よって、本資料は川西編年Ⅴ期、埴輪検討会編年Ⅴ-1・2 期に該当し、古墳時代後期初頭から前葉頃とみなしうる。

なお、以上の特徴は、町教委による調査での出土資料（図 4）とも共通する。町教委の報告書では、所属時期について「出土した円筒埴輪、家などの形象埴輪片の編年から 5 C 後半から 6 C 前半」（田中他 2000、p23）、「5 世紀末頃の所産」（田中他 2002、p29）と位置づけられており、さきに想定した年代ともおおきな齟齬はない。

形象埴輪について 今回、あらためて資料調査をおこなった結果、従来報告されていなかった石見型埴輪・蓋形埴輪を見いだすことができた。さらに、町教委調査分では人物埴輪腕部と目される破片（図 4-60）があるので、人物埴輪を埴輪組成にくわえることができる。

【石見型埴輪】なかでもとくに注目されるのは、比較的破片数がおおい石見型埴輪である。ちなみに、町教委調査で出土した埴輪にも、石見型埴輪と目される例（図 4-59）がある。出土点数からみて複数個体の存在が予想できよう。

これらの破片にもとづき、全形を推定した（図 10）。個体識別が不十分で、これらの破片が同一個体とはいえないが、おおまかな特徴はとらえられていよう。以下、特徴をまとめておく。

まず、形象部は 4 段構成の可能性がある。文様構成についてみると、上 1 面は輪郭にそって 2 条平行沈線により区画後、内側を弧状表現で充填するようである。上 1 面とみた 52 の形状から、上 2 面との境界に側辺えぐりが想定できるが、四隅の切り欠きの有無は不明である。また、上辺のえぐりの有無についても、該当破片が見いだせないの、不明である。上 2 面は 47 が該当するとみたが、それによると施文は上 1 面と同様であったとおもわれる。なお、粘土板や粘土紐による立体的な表現をのこす破片は確認できな

かったので、上 2 面と下 2 面は立体的に区分されていなかったようである。それにつづく中央分割帯と下 2 面については、該当破片を特定できず、詳細は不明である。さらに、その下位にあたる下 1 面は、45・51・53 等がこれに相当するとかんがえて、上 1 面と同様に 2 条平行沈線による輪郭にそった区画と、その内部の弧状表現による充填という構成を想定した。また、51 の上辺形状からは、下 2 面との境界に側辺えぐりがあったことがわかる。

その他に横方向の直線で区画する破片（38・48・49・50）がある。とくに 49 では横方向の区画と直交する縦線が付加される。これらについては、図 10 の復元案では該当箇所を推定しがたいので、別文様の別個体の可能性もある。

さらに石見型埴輪の形象部には刺突が一定間隔で配されることが通有である。しかし、すくなくとも遺存破片にかぎると、本例にはこうした刺突は確認できなかった。

石見型埴輪については、すでに多くの研究者によって検討がすすめられている。ここでは、以上の特徴をふまえたうえで、従来の主要な分類案との対応を整理しておく、鐘方正樹氏による A I 類（鐘方他 1995）、和田一之輔氏の 4 分割線刻型（和田 2006）に相当するとかんがえる（10）。

石見型埴輪については、滋賀県内では米原市山津照神社古墳（高橋 1995）・同塚の越古墳（宮崎 1991）において土製品の出土がしられていた（河内 2013）。木製品までふくめると、野洲市林の腰古墳（野洲町教育委員会 1988、野洲市教育委員会 2005A・B・C・D、野洲町歴史民俗資料館 2001、辻川 2010B）・守山市服部 19 号墳（大橋他 1984）での出土事例がある。今回、木村石塚古墳で石見型埴輪の存在を確認したので、土製品としては滋賀県内で 3 例目、木製品もふくめると 5 例目の出土例となった。

7. おわりに

以上、ながらく収蔵庫に死蔵されてきた平成 8（1998）年度試掘調査で出土した木村石塚古墳出土埴輪について検討した結果、従来しられていなかった石見型埴輪等の存在を見いだすことができた。また、木村石塚古墳について実施されてきた調査内容についても、現時点で入手しうる情報から可能なかぎり復元をこころみた。しかし、冗長な記述のわりには、十分といえる結論にいたらなかったことは承知している。今後も、原図をふくめ、関連資料の検索をつづけるとともに、木村石塚古墳以外の埴輪資料の再検討とあわせて、木村古墳群の基礎的検討作業をおこなう予定である。取りのこした課題は多いけれども、あらためて論じることを期して、ひとまず本稿をおえることにしたい。

〔付記〕試掘調査の状況と資料の存在についてご教示をいただいた平井美典氏に感謝を申し上げたい。資料実見にあたり、東近江市教育委員会、滋賀県埋蔵文化財センターと当時のご担当である小竹志織氏より御高配を賜った。さらに、河内一浩・和田一之輔・

東影悠の各氏から、石見型埴輪をはじめ埴輪資料について御教導をえた。とくにしるして、感謝を申しあげたい。

註

- (1) 「石塚古墳」と通称されている。しかし、同名の古墳は他にも存在する。それらと区別をはかるため、本稿では大字名である「木村」を冠して「木村石塚古墳」と呼称する。
- (2) 平成 8(1996) 年度試掘調査の内容については、調査担当者である平井美典氏からご教示をえたほか、当該調査の概要報告書（財団法人滋賀県文化財保護協会 1997）を参考にした。この概要報告は調査機関から調査主体・原因者へ提出された少数の公文書である。通常、こうした試掘調査内容は、その後に発掘調査が実施された場合、発掘調査報告書に掲載され、それによって内容はひろく公開される。さらに、現在、滋賀県文化スポーツ部文化財保護課が実施する試掘調査結果については、遺構の検出・遺物の出土にかかわらず、年度ごとに刊行される『滋賀県埋蔵文化財調査報告書』ですべて報告され、公開がはかられている。しかし、本例の場合、不幸なことに発掘調査報告書に試掘調査結果が掲載されなかったため、この概要報告書が調査の内容をしる唯一の手がかりとなってしまった。かさねて不幸なことに、県協会が保管する当該年度の概要報告書は保管年限規定にもとづいて廃棄された。これは文書の保管規定による正当な処置ではある。けれども、本例のように、記録保存の成果物に準じるような事例については、調査主体や調査機関として、機械的に取りあつかうのではなく、事例ごとに適切な選択がなされるべきであった。なお、本稿の執筆は、辻川が廃棄前にコピーしていた当該概要報告書の写しにもとづく。
- (3) 報告書の器種認定にしたがったが、やや不安がのこる。後述するように「盾型埴輪」（図 4-59）は石見型埴輪である可能性がたかい。「人型埴輪」（図 4-60）は、形状から人物埴輪の腕部とみなしても違和感はない。ただ、「家型埴輪」（図 4-69～72）とされる破片には、その可能性がある例もある一方、それ以外の可能性がのこる例もあって、さらに検討を要する。
- (4) 報告書の器種認定にしたがったが、やや不安がのこる。図 4-6 は普通円筒埴輪口縁部として報告されている。けれども、形態的特徴からみて底部片であることはあきらかである。また、円筒埴輪とされたなかでも、線刻をくわえた例については、形象埴輪としてあらためて見なおす必要がある。
- (5) 以下、円筒埴輪に関する記述は、おもに川西宏幸氏の論考にもとづく（川西 1978）。
- (6) 2 条平行沈線とは、2 条のはぼ平行する沈線表現の意味でもちいる。2 条の沈線はおおむね平行するが、幅が一定しない部分もあるので、1 条ずつ別個に施文されたとかんがえる。
- (7) 実測図では、横線を斜め方向に位置して図示しているが、成稿後に、本来は水平方向にすべきものであることに気づいた。この点を修正しておきたい。
- (8) なお、平成 12（2001）年度発掘調査報告書（田中他 2002）に掲載された「第 2 図 年度別調査位置図」には、ほ場整備事業

にともない町教委によって実施された調査地の配置がしめされている。それには、平成 10・11 年度調査の「石塚古墳確認調査区」の南側にも比較的ひろい調査区が図示されている。しかし、この調査区については調査報告書に一切記述がない。「石塚古墳確認調査区」との位置関係からみると、後円部の南側と周溝に相当する部分にあたるから、この調査区の成果を参照すれば、古墳全体の様相が判明したことが予想される。その成果が公開されなかったことは残念である。

- (9) 今回、試掘調査結果や各年次の発掘調査で調査された石塚古墳周辺の調査区について、報告書に掲載された実測図をつなぎあわせ、周溝と目される遺構配置を検討し、周溝をふくめた墳丘平面形態の復元をこころみた。しかし、いずれの調査区も国土座標で表示されていないため、調査区相互の空間的關係を確定できず、その成果を本稿でしめせなかった。この点については、各調査で作成された実測原図まで立ちかえったうえで、あらためて検討を期したい。
- (10) なお、河内一浩氏による分類（河内 2008A・B）は、上 1 面の文様分割法を主眼としているため、本資料のように当該部分の文様分割の様相をしめす資料にとぼしい場合は適用しがたく、本稿ではしめせなかった。

文献（著者名・機関名 50 音順、刊行年順）

- 大橋信弥・谷口徹（1984）『服部遺跡発掘調査報告書 V』滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 鐘方正樹・中島和彦・安井宣也（1992）「菅原東遺跡・埴輪窯跡群をめぐる諸問題」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1991』奈良市教育委員会
- 鐘方正樹・中島和彦・根本直子（1995）「奈良市秋篠町奈良少年院出土埴輪の研究（上・下）」『古代文化』47-5・6、財団法人古代学協会
- 河内一浩（1997）「イミテーションと祭祀空間」、梶山林継・山岸良二編『原始・古代日本の祭祀』同成社
- 河内一浩（2008A）「東弓削遺跡出土の石見型埴輪」『研究紀要』19、八尾市立歴史民俗資料館
- 河内一浩（2008B）「河内における“いわゆる石見型埴輪”の様相—施文方法からの分析（予察）」『古代学研究』180、古代学研究会
- 河内一浩（2013）「近江の国の石見型埴輪」『淡海文化財論叢第七輯』淡海文化財論叢刊行会
- 川西宏幸（1978）「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2、日本考古学会（川西 1988 に収載）
- 川西宏幸（1988）『古墳時代政治史序説』塙書房
- 財団法人滋賀県文化財保護協会（1997）『県営ほ場整備事業に伴う試掘調査概要報告書』
- 滋賀県史蹟名勝天然記念物調査会編（1936）『滋賀県史蹟名勝天然記念物調査概要』
- 高橋克壽（1995）「山津照神社古墳の埴輪と 6 世紀の畿内の埴輪」『琵琶湖周辺地域の 6 世紀を探る』京都大学考古学研究室

- 田中 浩・福地博史（2000）『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅷ 蛭子田遺跡 木村古墳群』（蒲生町文化財資料（22））蒲生町教育委員会
- 田中 浩・福地博史（2001）『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅸ 木村古墳群』（蒲生町文化財資料（24））蒲生町教育委員会
- 田中 浩・福地博史（2002）『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅹー木村古墳群ー』（蒲生町文化財資料集（25））蒲生町教育委員会
- 辻川哲朗（2003A）「近江地域の円筒埴輪編年」『埴輪論叢』4、埴輪検討会
- 辻川哲朗（2003B）「突帯ー突帯間隔設定技法を中心として」『埴輪ー円筒埴輪製作技術の観察・認識・分析ー』（第52回埋蔵文化財研究会発表要旨集）埋蔵文化財研究会
- 辻川哲朗（2006A）「近江の須恵器系埴輪」『淡海文化財論叢第一輯』淡海文化財論叢刊行会
- 辻川哲朗（2006B）「米原市村居田古墳の再検討」『紀要』19、財団法人滋賀県文化財保護協会
- 辻川哲朗（2007A）「東近江市大塚古墳採集の須恵器系埴輪について」、『淡海文化財論叢第二輯』淡海文化財論叢刊行会、
- 辻川哲朗（2007B）「彦根市大堀町大堀山出土埴輪について」『紀要』20、財団法人滋賀県文化財保護協会
- 辻川哲朗（2010A）「安土山・織山周辺の埴輪」『紀要』23、財団法人滋賀県文化財保護協会
- 辻川哲朗（2010B）「近江・林ノ腰古墳の再検討」『同志社大学考古学研究会50周年記念論集』、同論集編集委員会
- 辻川哲朗（2011A）「近江・湖東北部の埴輪」『紀要』24、財団法人滋賀県文化財保護協会
- 辻川哲朗（2011B）「近江・富波亀塚古墳出土埴輪の再検討」『琵琶湖と地域文化』林博通先生退任記念論集刊行会
- 辻川哲朗（2011C）「近江・越前塚古墳採集埴輪の再検討」『淡海文化財論叢第三輯』淡海文化財論叢刊行会
- 辻川哲朗（2013）「近江・ケンサイ塚古墳出土埴輪について」『埴輪研究会誌』17、埴輪研究会
- 辻川哲朗（2018）「大津市木の岡町所在車塚古墳出土埴輪についてー昭和五九年度発掘調査資料の紹介」『淡海文化財論叢第十輯』淡海文化財論叢刊行会
- 中川泉三編（1922）『近江蒲生郡志 卷壺』滋賀県蒲生郡役所
- 中島 尹（1990）『きむらのむかしからいま』（私家版）*滋賀県立図書館所蔵
- 埴輪検討会編（2003A・B）『埴輪論叢』4・5
- 宮崎幹也（1991）『塚の越古墳』近江町教育委員会
- 野洲町教育委員会（1998）『平成9年度野洲町内遺跡発掘調査概要』（野洲町文化財資料集1998-1）
- 野洲市教育委員会（2005A）『1993・1994年埋蔵文化財調査年報』
- 野洲市教育委員会（2005B）『1995年埋蔵文化財調査年報』
- 野洲市教育委員会（2005C）『1996年埋蔵文化財調査年報』
- 野洲市教育委員会（2005D）『1998年埋蔵文化財調査年報』
- 野洲町立歴史民俗資料館（2001）『古代国家の始まりー近江野洲の王たちー』（平成13年度秋季特別展示図録）
- 和田一之輔（2006）「石見型埴輪の分布と樹立古墳の様相」『考古学研究』53-3、考古学研究会
- （つじかわ てつろう：調査課 主幹）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.34 2021.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages